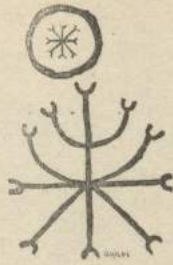


しかし不可知論の立場にたえず、歴史性の立場において、実在した彼を見なければならぬ。維新の志士たちの私的待合的結合力が終息し、独占の自立とともに、日本には真制の資本制が必要になった。明治維新は終わったのである。そのとき、日本には初めて合理的な実務政治家の登場しなければならぬ歴史事件がそなわった。それは最初のA自由VでA民主Vな形態を内包せざるを得なかった。

石原莞爾の實踐理論



一個の創造的な頭脳としての石原莞爾について書け、というのが、編集部から私のためにいたる注文であるが、私はその申し出をいく

注意しないわけではなかったが、しかし私の彼に対する知識は、間接的で断片的たるをまぬがれなかった。

一九四五年のある日、もちろん敗戦後のことだが、当時、病院にあった石原莞爾を、アメリカの将校が、調書をとるために訪ねたとき、彼は「もし私が戦争の指導をしていたら、貴方と私とはその立場が違っていただろう」と言ったと伝えられた。司令官でもない下級のアメリカ将校に、そんなことを言ってみたって、何になるかと思うのだが、石原としては、一言いってみただかたほど、もし自分がやっていたら、負けてはいなかった、という秘かな自信があったことは、彼の遺している文書を通じてわかる。彼の考え方は満洲事変につづく十五年戦争の後半期ごろから彼が主宰していた「東亜聯盟」という思想集団の綱領（「東亜聯盟綱領」）その他に記されているが、それによると日本、満洲、中華民国を、人道主義的な「王道」をもって、連れることよって、日本と東亜を西洋の「霸道」の攻撃から不敗の位置におくことができる。彼は考えていた。

しかし私は、いま改めてこれらの書を、二

かくしてデモクラチズムは被支配階級の要求としてではなく権力の要求として、登場する。そのみが真制の資本主義を育成するのであり、独占の横暴をとり除くという後藤新平の合理思想は、そのまま、独占の真の強化と、日本資本主義の強化とに奉仕していく思想でもあった。

後藤新平は文明がもたらすに違いない有用性を創造し、日本をアジアの王者たらしめた

たがも断ったように、決して適任者ではない。というのは私が石原莞爾について知っているのは、ほんの僅かで、とくに一九三二年いらいは、何の交渉ももっていないし、仙台や京都やまた山形の鶴岡にあった彼を訪ねる

十年の歳月をへだてて読んでみると、かりに石原を參謀総長と総理大臣とを兼務するほどの独裁者の地位にすえていたとしても、とても勝利できたとは思えないほど、その着想は幼稚である。もとよりそれは、当時の日本人のモノの考え方の、水準の低さにもよるが、彼は日本人、とくに在満・支の日本人が私利私慾を制し、満洲を文字通り五族協和の理想国家とすることを第一に考えた。そしてさらに一九三八年重慶を脱出して、日本側について汪兆銘を重要なカギとし、彼の代表する第二の中華民国に、従来、日本の領有していた中国における権益の一切を返還し、真に平等な日中関係を打ち立てるならば、蒋介石の代表する重慶政府は、汪兆銘の南京政府と一つになるという構想である。

このような類型の政策思考は、当時としてはけっして珍らしいものではなかった。満洲国はすでに志を得ない日本の官民の、掃き捨て場になっており、中国侵略また失敗の徴候歴然として日本の中国政策の方向転換を策さざるを得ないときであったから、ゾルゲ事件の尾崎秀実のごときも、近衛文麿のブレインとして汪兆銘に希望を託していた一人であっ

人物たちの典型となった。その全才能をA国家Vにのみ捧げ、昭和四年七十二歳で世を去った。それは偉大とっていい生涯であった。明治のどの政治家たちよりも誠実で、大きな能力をもっていた。なによりも無私であった。しかし、はたしてその生涯に、その甲斐があったらうか。ことは文明に関する原理に移行するのであり、もはや政治や実務の思想と離別するのである。

岡本清一

機会は私にはなかった。それは気持の上からも、また思想的にも行動的にも、石原莞爾とは、すでにちがった方向へ歩いていいたからである。しかし一人の、当時としては、もっともすぐれた日本人であった石原莞爾の言動に

た。そして私の無力な反対意見にたいしてきえ、きわめて不快な表情を示す程、彼もまた汪兆銘のかつき出しに熱心であった。しかし歴史は、満洲国も第二の中華民国づくりも、すべて失敗におわるべき小細工にすぎなかったことを示した。もちろん人間の世界のことであるから、一つの卓抜したアイディアが人々の心に連鎖反応を起して、既倒の挽回を可能にする場合もあるが、しかし太平洋戦争が勝利におわったかも知れないという仮定は、今日からみればとても成立するものではなかったのである。

この石原莞爾の着想の甘さは、もとより基本的にはそのころの日本人全体の世界にたいする無知に由来していたわけだが、しかしそれは彼の人道主義的世界観と無関係ではなかった。彼の最後の著作（「遼東紀行」）が、「日蓮蓮教入門」というのもわかるように、日蓮を通しての法華経の行者として死んだ彼の理想主義は、日蓮に対するその信仰にもとづくものであった。この書の冒頭には、往年の彼の豪毅果敢の印象は影をひそめて、「高僧を思わせる」と評された晩年のころの遺影と筆跡がかかげられているが、ともに深い静寂を

滲み込んでいる。

彼を日蓮に媒介した者は、彼が終生「大先生」と呼んで、畏敬おくあたわなかつた智学田中巴之助である。教団「国柱会」を組織して、権威高く活動していた田中智学に、石原がどのようにして近ずき、彼に傾倒していったか、私はそれを審らかにし得ない。しかしおそらく第一次戦争直後の、いわゆる「大正デモクラシー」時代の、あの宗教的ヒューマニズムの爆発の中で、田中智学の比較的新しい日蓮観が宗教的性格をつよくもつた石原を燃焼させたのではないか。そのころの田中智学はまだ若くして柔軟であり、やはり法華経の信者として死んだ東北の詩人宮沢賢治や、今日のすぐれた平和主義者上原専祿などもその影響下においていたが、彼の宗教理論の特徴は、日蓮の教義と天皇中心主義とを結びつけた点にあった。その独創的な理論体系は、日蓮の教義に対する解釈の歴史を、彼をもって分つほどの意義をもつた。彼は日蓮の遺文の中の、日本の天皇主義を積極的に肯定するとみられる文章、たとえば「王法仏法に冥し、仏法王法に合し」(三大秘法鈔)「当に知るべし、此の四菩薩、折伏を現ずる

とを信じつつ、石原はその生涯を了つたが、それ自身、現実的な、まことに現実的な軍事と政治の問題を、このような神秘主義をもって貫いては、その理論と実践とは、天空に遊んで現実に着する暇がないのである。

二

「世界最終戦論」(一九四〇年)と「戦争史大観」(一九四一年)における石原莞爾の戦争史観は、戦略家としての、また戦史学者としての、彼の面目をつたえるものであるが、それは彼の頭脳の獨創性を示して余りがある。とりわけ「人類の前史終らんとす」との副題をもつた「世界最終戦論」は、彼が京都十六師団の留守師団長としてあったときの講演速記に加筆したものであるから、筆致は流麗にして、その史観は雄大かつ的確、真実ながら私の読んだどの戦史よりもすぐれていると思われるが、しかしこの書の後半部分、すなわち彼の天皇主義の日蓮信仰をつたえた部分は、戦争史観を語った前半部分と、いちじるしく違和感、この著全体を惨憺たるものにしてしまっている。

石原はたえず、口癖のように、「私は軍人

時は賢王となつて愚王を誠責し」(観心本尊鈔)等々に独自の解釈をあたえ、これを記紀の文章、とくに日本書記における神武天皇東征の詔と称するものに照合させて、その神秘的な天皇主義理論(国体理論)を体系づけたのであった。

石原莞爾はこの田中智学における神秘主義的天皇理論と、予言宗教としての日蓮教の教義とを、ともに信仰的に深く彼の思考の根底においた。それは彼の純真な直線的な人となりによつて、一点の疑いもなく、受け入れられた。かくて彼の思想と行動とは、この宗教理論によつて特徴づけられ、その人生は田中智学の日蓮主義を奉ずることによつて、すぐれた安心立命の境地に至り得たが、しかし、智学における神秘的な天皇主義の世界観を受け入れたことによつて、その宗教的な安心立命と引きかえに、彼の理論体系、したがつてその実践理論は、無惨にも支離滅裂なものとなつた。もちろんこのような思考の悲劇は、石原のみのことではない。それは深く明治維新と明治時代の文明的性格にもとずき、さらに加うるに、明治天皇の君主としての偉大さによつて、古代日本らしいの、天皇を神とす

ですから」といって、軍事以外のことを語るのを避けていた。このことばを、ときには煙幕としても使用していたが、しかしそれは一見、不屈不遜であつた彼の、真の人となり、きわめて謙虚であつたことを示すものとも考えられる。それだけに、彼は軍事以外の思考を鍛練する機会をもたず、ほとんど借り着のまま過ぎてきたとも見えるのである。しかも彼が、そのまま借り着してきた田中智学とその一統の教義は、恐るべき自信に満ちたものであり、またそれはさかのぼれば日蓮が自らを末法の救世主、上行菩薩の再現としての予言的人格として自覚した自己信仰の強烈さにもとずいているが、この強烈・峻厳な信仰の姿勢を、純真に護りつづけてきた彼は、その信仰を歴史に従わせるのでなくて、歴史を日蓮と田中智学によるその信仰に従わせようとしたのであつた。彼の戦争史観が木に竹を継ぐ弱点を暴露したのはそのためである。これはただに彼の理論においてばかりでなく、その人生の弱点をなしたとも考えられる。

石原莞爾は、来るべき戦争を、ちょうど優勝決定戦のように、世界の最後の覇者を決定するための最終戦争だと確信していた。そし

る断片的思考は、容易に明治天皇の人格を中心に体系的に結晶し、天皇を生ける神とすることをうたがわず、これに神秘的な世界史的使命を託する風潮が生じたのであつた。石原莞爾の師、田中智学もまた日蓮の使徒として出発しつつ、このような日本の近代史的環境の中で、その宗教理論を天皇中心主義的なものとして削り上げたのである。

かくて石原莞爾は、「世界は政治的に一つになる」「真の世界の統一、即ち八紘一宇が始めて実現せられる」「天皇として世界を統一せられるのは観念の問題ではありませぬ、生々しい現実の問題です。」(「世界最終戦論」)と考へたが、この思想は彼の臨終の床にまでつづき「昭和二十年八月十五日の、女々しいとまで思われるやさしさの中に、凜然たる覚悟をしめされた平和の女神の如き敗戦日本の天皇のおすがたの中に賢王のおすがたの潜在を拜するものである。」「結局、世界統一は力によらずしてあなたかたかな徳の力によるものと信ぜられる。武装なき日本に本門戒壇を建立せられた天皇が、満目荒涼たる最終戦争の惨害のあとに立たせられ、南無妙法蓮華経の精神的威力によつて絶対平和を指導される」こ

ていまままでの戦争の歴史は、短期の決戦戦争と長期持久戦争とが、社会の体制と兵器の質とに応じて交互にこれを繰返えされてきたことを著見した。そしてついに持久戦争たる第一第二次世界戦争にいたつたが、次は航空兵器の極度の発達と、驚くべき決戦兵器の開発とによつて、世界人類を半分にしてしまつほどの、短期決戦戦争が行なわれると判断したのである。

この世界の統一と平和をもたらす最終戦争は一九四〇年から数えて五〇年以内、すなわち一九九〇年ごろまでに起るが、それは国家連合と国家連合との戦いであり、戦線と銃後、軍人と市民の区別なく、交戦国の大都市はほとんど破壊される。そして大隊(古代)から中隊・小隊(近代)・分隊(現代)にまで倭少化した戦争指揮の単位は、ついに最終戦においては、個人となる。しかし戦争なき時代を想像することができなかった当時の日本の軍人たちは、石原の戦争史観をほとんど無視した。

この武器の高度の発達を契機とする世界最終戦争のアイディアは、すでに石原以前に成立しているが、彼をしてこの理論を熱烈に唱

導せしめるものは、その信仰による自信であった。それは「前代未聞の大闘争(戦争)」「關浮提(全世界)に起るべし」(撰持)という日蓮の予言に支えられ、さらにその後において、日本の天皇による世界支配(八紘一宇)が行なわれるという田中智学の日蓮解釈にもとづいていたのである。したがって彼の予言の最終戦論は、いよいよ雲の中を駆け回ることになるが、その決勝戦は、日本の天皇を中心とする東亜の連盟と、アメリカを主力とするいわゆる西洋諸国の連盟とによって、太平洋をはさんで行なわれることになる。考えれば「東亜連盟協会」なる政治結社を組織し、アジアの全域にわたって同志をつのり、その来るべき世界最終戦に備えるという壮大なユートピアを画くことになったのである。

しかしそのユートピアは最終戦のためだけでなく、未来社会の構想に及び、大都市を解体した農工一体の社会を彼は空想した。そのユートピアにおいては、自然と社会の調和があり、大森林と流れる河に近く、近代科学の粋をあつめた豪華なホテルのごとき共同住宅があり、町があり、田園があり、工場がある。そして「天皇も皇太子も大臣も画家も文

おそらく後年の軍務課長時代の末期ごろか、もしくは東条英機と対立して京都十六師団長に左遷されたころにはないかと思われる。

彼が仙台に赴任するために満洲からかえって東京青山の私邸にあったとき、船口万寿

(故人)、石井秀雄(通産省課長)と私の三人は、石原莞爾を訪ねたが、そのときの彼は、明らかにいわゆる北支への軍事的進出を

考えていた。その理由は満洲には石炭その他

の物資が十分でない、というのがその理由であつた。そして満洲を日本の資本による収奪

の市場としてはならないというわれわれの意見をよく知っていて、「貴方がたはギヤアギ

ヤアおっしゃるが」というような感情的な表現をもって、不快さを示した。そして私の

「北支へ進出すれば支那の巨大な民族主義的

抵抗にあつたことを覚悟しなければならぬでしょう」ということばにたいして、「支那には

ネ、あなたのような理想主義者は居りませんヨ」とと嘯んで吐き出すようにいったが、そこ

には後年、中国侵略に猛然と反対したあの石原莞爾を想像させるものはなかった。私はそのときのことをこう書いた。

士も、朝のひとつときは畑に立って土にしたしむ」そしてまた「整備された機械に向ってすべてを忘れて働く」(四門)というのである。

しかし準決勝戦としての第二次世界戦争における日本の敗北によって、彼の理論は修正を余儀なくされた。彼は言う「今日、私は東亜連盟の主張がすべて正しかったとは勿論思わない、最終戦争が東亜と欧米との両国家群の間に行なわれるのであらうと予想した見解は、甚しい自惚れであり、事実上、明らかに誤りであつた」(石原莞爾將軍の遺言「日本の進路」)ことを認めながら、しかし最終戦の到来と、天皇による八紘一宇の実現とは、彼の不動の信仰としてその死の瞬間まで生きていたのである。

三

このようにして彼の科学としての戦争史観は、一つの空想的史観に墮してしまつたが、しかし彼の名が、その死後においても、なおしばしば語られるのは、当面の問題にたいする判断的確とその処理の果敢なること、そしてそれを彼の空想に結びつけて、雄大な意義をこれに附与したことに理由がある。石原

「僕は数時間の会見を通じて、彼の言葉だけが印象に残っている。それは決して豊かな心理から発せられる言葉ではなく、思ひ上つたものそれに似ていた。なるほどそのときの彼は、今とさきあぐ陸軍大佐石原莞爾であつた。掃蕩、船口は歩きながら、「石原さんは歴史眼に欠けていません、資本主義にたいしてどうでしょう」と感嘆を漏していた。(中略)人はその得意の時代には往々にして精神的に低くなるようである。一旦政策の中に根を植すと、多くの人はすべてを物の基として計らうとする。ある意味から言へば、志を得るといふことはその人と世のためにも果して伴せてあるかどうか疑問である場合が多い。石原莞爾は確かに、その時に志を得ていた。また彼が後に参謀本部の部長として羽振りを利かして、中野正剛たちと意気投じて、政治の表面に立ち現われて、いたころ、野にある者は必ずしも彼の言動を迎えなかつた。しかし、いま石原莞爾もまた志を失つてから久しい。世に容れられることも少くして、故山にありて理想に邁進せんとしつつありと聞く、すでにあれ以来、十年に近い歳月が流れている。」

石原が対米宣戦布告にたいして反対だつたという理由と心境とについては、私にはよくわからない。それは彼の側近にあつた人々の言葉に聞くほかはないが、おそらく石原にとつては、アメリカは世界最終戦の相手であるとともに、満洲国の育成をカギとする「東亜連盟」の建設に支障を来すと考えたからではないか。したがって日米間が急を告げていたころ、専制的な夜の国日本と自由主義的な風土の国アメリカとを対置して、日本の敗北を予

莞爾の名は満洲事変とともに不朽だが、満洲に事を構えようとする彼の構想は、陸大教官だつたその若き少佐時代に画かれていた。彼は「満洲を丁戴いたします」といつて関東軍参謀として赴任した。そして「中佐になれば俸給が上りますから、調査費用が出ます」と語り、やがて彼の上官、のちの陸相、ときの関東軍高級参謀だつた大佐板垣征四郎は、「私は石原君の命令どおり動いているだけです」といつた。そのころ満洲占領のための周到な用意が、天才的な戦術家石原莞爾によって、まったく秘かにすすめられていたのである。一九二九年のころのことだ。

満洲占領の直前には満洲に五族協和のユートピアを作らうとするような考えは、まだ石原莞爾には芽生えていなかったように思われる。その日蓮信仰は彼の現実的な行動計画にたいする指導力を、十分に発揮するところまでいっていなかったのである。また彼が満洲事変の二年のち、仙台に連隊長として転動するときは、のちに「支那事変」に反対しつづけたような立場は、これまた未成立であつたと考えられる。彼のアジアに対する理想主義が、その実践理論の中に根を下したのは、

想し(津久井寛雄) またアメリカから帰つてすぐの賀川豊彦が、米国の龐大な生産力をつたえて、精神的・物質的貧乏国日本の敗北を必至だと、彼の教会において、私かにわれわれに語つたのとは、その趣を異にするものがあつたように思う。

しかし東条英機とその政府の戦争政策にたいする彼の反対は、恐れる者なき勇氣に満ちたものであつた。それは軍事に關係せよという誘惑を斥け、消極的に不協力であることが精いっぱいだったわれわれ一般知識人のとうてい及ぶところではなかった。そして彼の場合には、陸軍中將というその地位を計算に入れたの抵抗でなかつたことは明らかである。勇氣・果敢は、彼の逸話として多くの人々によつて語られているように、石原莞爾に生来のものとして備わつていた資質であつた。

彼の部下でのちの陸軍情報部長の松村秀造は、二・二六事件における石原莞爾について記しているが、そのとき石原は決断のつかないかつた戒嚴司令部において「直ちに攻撃、軍は本二十八日正午を期して総攻撃を開始し、反乱軍を全滅せんとす」と命じ、爆撃隊の出動、重砲の砲撃を手配した。そして降伏しな

ければ殲滅する決意をもって叛乱軍との交渉に当らせ、態度を決しかねている「司令官に向つて『日本にも妙なヒゲをはやくらかした大将がおりましたね』と例の調子で罵倒を始めた……両大将は上官を馬鹿にしておると、ブンブン怒りながら出て行かれた。」（日本週報三年）

石原莞爾略歴

明治二十二年一月十七日

山形市鶴岡市に生まれる。

同 四十二年十二月

士官学校卒。

大正二年二月

中尉。

同 四年十一月

陸軍大学入学。

同 八年四月

大尉、第六十五聯中隊長。

同 九年四月

中支那派遣隊司令部附。

同 十年七月

陸大兵学教官。

同 十一年八月

ドイツへ軍事学研究のため出張。少佐、十四年十月まで。

昭和三年八月

中佐、十月、関東軍参謀として満洲事変勤務に従事。大佐、七年八月まで。

同 七年九月

ジュネーブの国際連盟総会に帝

国代表随員として出張。

同 八年八月
同 十年八月

歩兵第四聯隊長
参謀本部課長、この間二・二六事件の戒嚴参謀を兼務。

同 十二年三月

陸軍少将、参謀本部第一部長、この間蘆溝橋事件、日中事変。

同 十三年十二月

舞鶴要塞司令官

同 十四年八月

中将、第十六師団長。

同 十六年三月

予備役編入。以後東亞聯盟運動に専念。敗戦後東亞聯盟は追放団体に指定され解散、後、病を郷里で養う。

同 二十四年八月十五日

山形県西山農場で死去。

かくて彼のあらわな抵抗が、その思想的立場のいかんにかかわらず戦時下の良心を勇氣づけたことは事実である。そして彼の宗教信仰が、その政府攻撃を、まったく私心のないものとしたことであつて、彼が戦時下日本の、もっとも魅力的な人間の一人であつたことを、恐らく彼自身は知らなかつたにちがいない。私は彼の永遠に眠る鶴岡の町が、どのように美しい森と水に恵まれたところであるかを知らないが、彼はたといその実践理論の支離滅裂さを指摘する者があつても、信仰によつて、一個の人間として卓越した安心立命